

# 和辻哲郎の読んだ「十二夜」

——「菜の花物語」以前——

辻 憲 男

*Twelfth Night* read by Tetsurou Watsuji

Norio TSUJI

## 要 旨

和辻哲郎が読んだラムの『沙翁物語』（明治三十六年刊）に就き、その中の「第十二夜」がいかなる翻訳であったかを検討し、それが、後の創作「菜の花物語」（同四十一年）にどのような影を落としたかについて考察した。それは少童のために、とくに少女向けに書かれた原著のさらなる通俗再話である。本文に即して、主人公ヴァイオラの独壇場たる要所を読み取り、以て和辻の心底に流れる浪漫的な感情の源を尋ねる手掛かりとした。

キーワード：和辻哲郎、「菜の花物語」、「十二夜」、『沙翁物語』

## 和辻哲郎が読んだ『沙翁物語』

和辻哲郎の一高時代の創作「菜の花物語」（明治四十一年〔一九〇八〕）の中に、

その顔は僕に『第十二夜』のヴァイオラの画像を思い出さした。ヴァイオラは優しい、可憐な、いたいけな少女であった。〔全集本による〕

という一行がある。「松村」と「僕」が奈良の博物館に入った時に近づいて来た女の、「ちらと見た」顔の印象である。この「ヴァイオラの画像」なるものが、和辻の読んだ『沙翁物語 マクベス外二篇』にあった一挿絵をさすものであることは、すでに指摘した〔後掲図版〕<sup>1)</sup>。最晩年の著作『自叙伝の試み』（昭和三十六年刊）に記す富山房発行の「通俗世界文学」叢書の第二編、ラム姉弟原著、杉谷代水編訳の、「マクベス」「あらし」「第十二夜」を収める一巻である（明治三十六年刊）。しかるに「ヴァイオラは優しい、可憐な、いたいけな少女であった」の一文は腑に落ちない。少し言葉足らずながら、この物語のヒロイン「桂子」もそのようであったという意味であろうか。確かにヴァイオラは優しく可憐である。しかし桂子はヴァイオラとは個性が違いすぎる。本稿はこの疑問から出発して、和辻少年の読んだ「第十二夜」がいかなる翻訳であったかを検討し、またそれが後の「菜の花物語」においてどのような影を落としたかについて考察する。論の主題は、和辻の心底に流れる浪漫的な感情の質を問うことである。

ラム姉弟の『シェイクスピア物語』は元より少年少女（とくに少女）のための読み物である。シェイクスピアの原作には及ばない。和辻が読んだのは、「世界文学を少年に近づけるための叢書」の中の「ラムの本を種本にしたようなもの」であった。叢書は坪内逍遙の校閲である。されば杉谷の「はしがき」にも、大詩人の戯曲は「こゝに紹介したやうな単純な無趣味なもの」ではないとある。が、「通俗といふ頭書の都合から、成るべくはチャールズ、ラムの綴りおいた例の物語の流義に従うてくれよといふ出版肆の需め」もあり、こうした「筋書様の物語」になったのだという<sup>2)</sup>。

しかも杉谷編の『沙翁物語』は原著 *Tales from Shakespeare* の忠実な翻訳ではない。ラムがシェイクスピアを巧みに和らげたように、杉谷もラムを通俗に再話したのである。一例をあげれば、「第十二夜」の冒頭は、

小亜細亜サイプラス島なるメツサリヤの一良家に男女の双生児があつた。  
男の方をセバスチアンと云ひ、女の方をヴァイオラと云つた。世にも双生  
児ほど似たものは無いと謂ふが、此の両人ふたりの肖やうは又格別で、かほかたち顔容は固もと

よりのこと、氣質から昔声まで、肖たとは愚か寸分違つた処といふは無く、  
若し男女の<sup>きもの</sup>服装を取り替へたなら、両親とても恐らく見別け得まいといふ  
程であつた。その上に二人は極くの仲善しで、兄上と呼び妹と呼んで、片  
時離れず親んでゐたが、因縁といふものは奇なもので、二人は同じ年同じ  
月同じ日に生まれたばかりで無く、亦た同じ時に怖ろしい災難に遭つたの  
である。といふのは、或目的あつて二人が伊太利の北部へ向け航海したと  
こ〔三字欠〕イリリヤの灘で〔以下略。原文は総ルビであるが、難読箇所  
以外は略した。ワ→ヴァなど表記を改めた〕

のごとくである。下線を付した部分が杉谷の付加再話である。教育的配慮であ  
ろうが、冗長にも感じられる。比較のために、小松武治訳『沙翁物語集』<sup>3)</sup>の  
中の「十二夜物語」の冒頭部分と、Lambの *Twelfth Night* の原文を掲げる。  
いずれも簡潔である。

セバスティヤンと其の妹ヴァイオラとはメッサリナ生れの双生児の紳士令  
嬢でありました。そして（これは大変不思議なこととせられてゐたので  
す）生れたてから二人大層酷く肖て居て、服装が違つてゐなかつたら、<sup>みわけ</sup>区別  
が付かないほどでした。二人とも同時に生れて、二人とも同時に危なく死  
なうとしたので、といふのは此二人が一緒に航海をしてゐたときイリ、ヤ  
近海で難船に逢つたのであります。〔地名等は頭注に注記する〕

Sebastian and his sister Viola, a young gentleman and lady of Messal-  
ine, were twins, and (which was accounted a great wonder) from their  
birth they so much resembled each other, that, but for the difference in  
their dress, they could not be known apart. They were both born in one  
hour, and in one hour they were both in danger of perishing, for they  
were shipwrecked on the coast of Illyria, as they were making a sea-  
voyage together.

### 杉谷代水訳の「第十二夜」

杉谷訳の「第十二夜（トエルフス、ナイト）」は一冊の後半部、64～113頁を

占め、それを展開上五つの小節に分ける。分節は原著になく、訳者の工夫であろうと思われる<sup>4)</sup>。次に大要を略記する。

(一) 64頁～ 双生児の兄妹がイリリヤの海で難船した。セバスチアンと生き別れたヴァイオラは船長に頼んで、少年に姿を変えて公爵オルシノの近侍に仕える。公爵はオリヴィヤ姫への求愛が通じず、シザリオことヴァイオラを可愛がり傷心を慰めた。

(二) 72頁～ シザリオは心に公爵を慕いながら、オリヴィヤへの取り持ちの使者に立つ。まず口上で興味を引き、面会が叶うと、役者の台詞よろしく巧みな話術でオリヴィヤの心をとらえる。——公爵の意には従わぬが、シザリオなら来てもよろしい。

(三) 85頁～ オリヴィヤは一計を案じ、シザリオに指輪を渡す。シザリオは「恋の三すくみ」に気づく。公爵に復命したが、公爵の気持ちは変わらない。翌日オリヴィヤから好意を告白されるが、その直後、男から決闘を挑まれる。窮地を救ったのはアントニオ。シザリオをセバスチアンと間違えたのだが、アントニオは役人どもに捕えられた。

(四) 97頁～ アントニオは難船した兄を助けた友人。望みを持ったヴァイオラは決闘の場から逃れる。そこへセバスチアンが現われ男と対決するが、今度はオリヴィヤがセバスチアンをシザリオと間違え、家に連れ帰る。歓待したあげく、結婚式まであげてしまう。

(五) 104頁～ 公爵はオリヴィヤとシザリオが結婚したと誤解する。あわやの危機に、再びセバスチアンが現われ、本人たちも人々も真相を知って驚く。兄と妹は再会した。公爵はシザリオが女だとわかると、にわかにな婚する。オリヴィヤは二人を取り持ち、すぐに結婚式を挙げさせた。めでたしめでたし。

人物は主要な四人だけで（アントニオを除く）、他の脇役たちは省かれている。女一男の交錯する主筋のみが取られ、マルヴォリオらをめぐる馬鹿騒ぎは無い。饒舌や道化がなく、「恋の三すくみ」の起承転結が明快である。ラムの原著がすでにそうであるが、元の喜劇の面白さよりも、兄妹とくにヴァイオラの

苦難と幸福といった少童好みの昔話を意図したのである。和辻少年も恋物語として読んだ。以下、ヴァイオラの活躍する（一）（二）の要所を取り上げる。まず初めは、兄を亡くしたオリヴィア姫に仕えたいと望むところである。

聞けばヴァイオラも似た様な身の上である。自分とても最愛の兄の生死も知らず、世にたより無く歎いてゐるところゆゑ、身につまされて誠に可哀相なこと、同じくは然ういふ方の側に居て、憂きを慰めあうたら、どの様に嬉しからうと、ヴァイオラは改めて船長に向ひ、どうか今の話を縁に、其の姫様<sup>ひいさま</sup>にこの身を召使つていたゞく様世話をして下さい。』と頼めば、

（一）

先に同じく、下線部が付加である。同じ一節は小松訳「十二夜物語」では、

ヴァイオラは自分も兄を亡くして嘆きにかきくれてゐたのでありますから、斯うも優しく同胞<sup>きやうだい</sup>の死去を悔んでゐる此の令嬢と何卒一緒に暮したいものだと思つたのです。そこで娘は自分をオリヴィアに紹介してくれることは出来まいか、此の令嬢<sup>みづかへ</sup>にお給仕<sup>ひきあは</sup>したく思ふからと言つて船長に頼みました。と簡略である<sup>5)</sup>。杉谷訳の「身につまされて誠に可哀相なこと」「憂きを慰めあうたら、どの様に嬉しからうと」は、少女らしい優しい心持ちである。みなし子の主人公の不幸な境遇は幼い読者の同情を誘う。ところがこの直後、その望みが難しいと聞くと、彼女は翻然、男装して公爵に仕えようと思案する。若い女が独り他国で生きるための手段、とは言え、並の手弱女にあらぬ知恵と勇氣である。しかも船長を買収し、早速にセバスチアンとそっくりの衣装を用意させる。この利巧な意欲が運命を切り拓く。少女読者は共感し声援を送る。男に変じた少女の冒険と活躍を期待し、男女の取り替えと取り違えの混乱を喜ぶ<sup>6)</sup>。——小道具の衣装が芝居を面白くする。原作のヴァイオラは一層したたかであまりなく、船長に守秘までも約束させる（第一幕第2場）。秘密保持は観客との間の約束事でもある。こうして騒動の仕掛けが整う——。

次いで、シザリオと名乗ったヴァイオラが、たちまち公爵に恋をしてしまう。運びが早い。原作では三日もたたぬうちに、「けれども自分の為には邪魔な骨折！ あの方の為に求婚はするものゝ、実は自分が奥さんになりたい。」という

傍白がある（第一幕第4場の最後、坪内逍遙訳）。苦しい胸のうちの秘し、公爵の煩悶を痛わしく思い、またオリヴィアに嫉妬を感じる。もっとも公爵が「女は薄情なもの」と言うのには（己のこととして）女を弁護しないわけにいかない、よしそれがオリヴィアを利する結果になろうとも、である。さらに続けて、自分の妹の話として、

私の父に娘がござりまして、其娘が或る男を恋慕致しました。私が若しや女でございましたなら、無難ながら殿様をば命にかけてもお慕ひ申すことでございませうが、丁度その通り慕うて居りました。が、如何した訳か娘は其の恋を誰れにも話さず、独りくよくよ致して居りまして、蕾の中の虫のやうに人知れず恋を蔵して居りましたので、その虫めが段々と石竹色の頬の血を吸って青白く致しましたが、それでも娘はあの「忍耐」の石像のやうに、昵と泳へて泣きたさうな笑顔をしてゐたのでございます。（二）と語る。下線部は杉谷の脚色である。公爵への思いが強調される。ラムの原著がすでに、原作第二幕第4場のこの台詞を前に移した。元は同第1～2場でオリヴィアに面会し、指環をマルヴォリオから渡され、オリヴィアの自分への思いを知ったあとの台詞である。

＊

さて、「菜の花物語」の中に、桂子の須磨の友だちが入水したという挿話がある。桂子は以前から事情を知りながら、友の「最も激しかった煩悶」の時をみすみす過ごしたことをしきりに残念がる。親の許さぬ人なのだろう、危うく助けられたが狂気昏睡し、衰弱していった。その後桂子は松村と毎日逢い、須磨へは行かなかった。死んだという手紙が来て大層悲しんだ。

「あゝ、私はなぜ渡辺さんの所へ行かなかったのでしょうか！」と桂ちゃんはさめざめと泣いている。「あゝ済まない事をした。私はどうしよう。行けばよかった、行けばよかった。」／桂ちゃんはほつれ毛を風になぶらせて愁わしげに青い海を見つめた。松村は慰めるにもことばが出ない。無言に立ち別れた。桂ちゃんはじっと海を見ていた。

二カ月後二人は再会したが、周りの人たちは交際に反対した。桂子は「私はひ

とりぼっちで苦しんでいたら渡辺さんのようになるかも知れません」と言った。——挿話と言うよりも、桂子の運命を暗示する伏線なのであった。松村は漂泊し、船中で腸チブスにかかって入院している間に、桂子は同じ病で死んだと聞かされた——。

桂子は「優しい、可憐な、いたいけな少女」であつたろう。友の死を我が事のように傷み、己の恋に悩み、しかし親の計略の故か松村の前から姿を消した。ところが今年の春、奈良でそっくりの女が（否、桂子が）現れた。半年前と様子が違って見えた。

桂子の物語がヴァイオラのそれと同じだというわけではない。ただ注意したいのは、二つの物語の底に流れる浪漫的感傷の類似である。松村はその時「木魂<sup>たま</sup>」についてしきりに説明した<sup>7)</sup>。「その時分は松村もまだ僕のような思い切った浪漫的な男でよく詩人を気取っていた」。松村も僕も、そして中学生だった和辻もおそらく同様のロマンティズムに浸っていたのである。戯曲やラムのヴァイオラは優しく凛々しく行動的である。聡明快活で喜劇役者のように性格的である。しかし杉谷訳になると、優しく可憐でセンチメンタルなヒロインである。しかも「菜の花物語」には難船も男装も取り違えの騒動も無い。作者が桂子をヴァイオラに喩えたのはやはり飛躍があるように思われる。

### シザリオの台詞

ヴァイオラには内省的な理知がある。シザリオとしてオリヴィヤに面会し、巧妙な弁舌で姫の頑なな心を解きほぐす。彼がこれほどの話術を操ろうとは、オリヴィヤのみならず観客も目を見張ったに違いない。メアリー・ラムは以下に見るように、原作第一幕第5場の台詞を見事に文章化した。「喜劇となると、原作の美点、興味は全くその微細な対話の受け渡しに存してゐる、筋は一段と複雑してゐるのであるから、それをあれまでに自然に、易々と仕上げてゐる手際は、実に見上げたものである」（平田禿木『ラム』昭和十三年。禿木自身はラム翻訳の至難なることを記した〔国民文庫刊行会『ガリヴァの旅・沙翁物語』同二年〕）。だがその決定的な違いは道化が出て来ないことと、言葉遊びでない真

実の「受け渡し」として語られることである。杉谷訳では、

ヴァイオラは真<sup>まこと</sup>の丈夫<sup>をとこ</sup>のやうに、足取り<sup>しつかり</sup>確りと姫の室に通り、領主の近侍たる上品な音調で、『これは卒爾<sup>おんあるじ</sup>ながら御主人<sup>ひいさま</sup>の姫様でござりますか。手前の台詞はめつたな方へは渡されぬのでござりますから、——哀れにおかしく書き卸してござりまして。』と先づ変つた口上を述べたので、姫は少々意外で、それでは何方<sup>どこ</sup>からお見えなされたのであるぞ。と問ひ反した。『そのお答へは此方<sup>こちら</sup>の書拔にはございませぬ、手前は覚えただけしか申されませぬ。』とまだ妙な事を云つてゐるので、『では貴郎<sup>あなた</sup>は如何<sup>どう</sup>いふ方であるぞ。』『さあ早く申せば役者の様なものでござります。』とヴァイオラは戯れて答へたものゝ、〔下略〕（二）

とある。奇妙な台詞なのでオリヴィアの反応を補足したのである。シザリオは「めつたな方」には申せぬ秘事と言い、内にもヴェールを被った姫の好奇心を引き出す。自分をどこの誰とも明かさず、役目を役者ふうに言い為す機知で韜晦する。このやり取りは軽妙で面白い。女は女の好奇心をよく知っている。

ヴァイオラの女心が顔を出すのは唯一、

主人<sup>つかひ</sup>の使命<sup>ちよつと</sup>の方は一寸後<sup>かたき</sup>に回して、恋の敵のオリヴィア姫の顔が見たくなり、の一句である。小松訳では「自分と恋争ひをする女の容態<sup>かほかたち</sup>を見てやりませうといふ好奇心で以て」having more curiosity to see her rival's features, than... とある。これを原作に求めれば、オリヴィアの台詞、「わたしの顔と談判<sup>いひつけ</sup>をせいといふ吩咐を御主人から受けて来ましたか？ そら、それは御本文以外でせう？」〔逍遥訳〕が該当する。You are now out of your text. メアリーはこれをヴァイオラの本心を衝いたものと解釈したのであろう。そしてこの時オリヴィアの心に恋が芽生え、以下の名台詞が展開する。

『さ、幕を明けました、よう人形を御覧なさい。美しう出来て居りませう。』  
ヴァイオラはつくづく見て、流石に驚いた。

『いかにもお美しい。いや造化翁が丹誠の傑作と見えまして、①肉附きといひ着色といひ、憎らしい程お美しいこととござります。それにつけても、此の良い型を後世にお残しなされぬ様では、上も無い罪でござりませう。』



といふに、オリヴィヤは少し斜<sup>そがひ</sup>になつて笑ひ、

『とはまた如何いふ罪であらうぞ。世界が生んだたゞの容貌<sup>ありやう</sup>で、②口が一  
つに目が二つ、手足が二つづゝ附いてをるだけの事、それを捉へて兎やか  
うと仰るは、あゝ聞こえた、あなたはお役目<sup>わらは</sup>で妾を褒めに入らつしやつた  
のか、さあ、たと仰つて下さい。』

と云ふので、ヴァイオラはこゝぞと、

『えゝ申しますとも、申さいで何としませう。お前様は実に高慢過ぎた、  
イヤサ矢張り美しい姫様<sup>ひいさま</sup>でございます。そのお美しさが手前主人の恋の  
種となりまして、それはそれは明暮と無き物思ひのお痛はしいこと、その  
様子を一目御覧じたら、なんば貴女が美人国の女王でも相応な御返礼は遊  
ばすべきでござりませう。オルシノ様には、長い長いこの日頃、歎いたり  
鬱<sup>ふさ</sup>いだり、たゞお前様の事ばかりを思ひくしてお在で遊ばします。』

と嫉妬の念も忘れて熱心に説き立つれば、オリヴィヤも流石に氣の毒にな  
り、

『それはもう、よく伺つて居ります。併し殿様にも妾の心は疾く御承知  
の筈である。高慢<sup>さげすみ</sup>など卑視もなされうが、何故<sup>なぜ</sup>にか妾は殿様を慕ふことは  
出来ませぬ。御品行なら御身分ならお人柄なら、何一つ瑕の無いことも知  
つてゐる。学問が有つて優しくて男らしいと世上でも専ら噂なれど、どう  
した因果<sup>いんぐわ</sup>か妾には氣にそまぬ、これはとうに彼の方に明けて申しておいた  
こと。』

と詫<sup>わづ</sup>める様に言ふのである。ヴァイオラは尚ほも熱心に、

『實際、主人のオルシノ様ほどに手前が貴女をお慕ひ申さば、御門前に③  
小屋でも構へ、朝夕貴女の御名を唱へ、貴女を題に歌を作つて歌つて歌つ  
て歌ひ通し、岡にも林にも④声<sup>こゑ</sup>を響かせ、貴女が憐れ<sup>おぼしめ</sup>と覚召すまでは、お  
寝<sup>よ</sup>らせ申すことではない。』

と何処<sup>どこ</sup>までも果<sup>はた</sup>しななければ、オリヴィヤは少し持て余し、〔下略〕(二)

杉谷訳は下線部(主としてト書き)を付加した。台詞の一部を小松訳と比較す  
ると、上記破線部は、

①暖気の失せぬ乳汁のうちに、グマスク薔薇の花汁を、搾り込みしとあやまたるゝ御顔色の華麗さは、(It is beauty truly mixed; the red and white upon your cheeks)

②——一、可い紅さの唇二つ。一、天明色の眼、附たり臉おのおの二つ。一、頸首 一、顎などと申すやう……。 (As, *them*, two lips indifferent red; *them*, two grey eyes, with lids to *them*; one neck; one chin; and so forth.)

③何悲しむやくよくよする柳の枝で小屋しつらへ、(I would make me a willow cabin)

④空飛ぶ鳥の囀ならぬ木精は御名を返響しきてオリヴィヤ！オリヴィヤ！と聞えませう。(I would make Echo, the babbling gossip of the air, cry out *Olivia*.)

のごとく、これはこれで装飾が加わる。ラムの原文はむしろ簡潔である。

戯曲の台詞は機知と諧謔の丁々発止である。その間断のない応酬はラムの散文にも生きている。しかしラムのみを読んで原作に到ることはできない。殊に上の場面などは、シザリオは再三、ヴェールを被った姫を侍女と識別しようとする。姫のほうも度々、この風変わりな使者の素性を問いたす。まさに役者ヴァイオラの独壇場である。進行上は双方の心の内が次第に露わになる趣向でもある。当然のことながら、杉谷訳からはそのような演出効果は知るべくもない。

### 喜劇としての「十二夜」

和辻少年は「第十二夜」を喜劇としてでなく、美しい少女の恋の成就の物語として読んだ。挿絵が心を捉えた。とくに少女読者に好まれるような主人公である。ラムには省かれたが、シェイクスピアのヴァイオラは文字どおり董 *viola* のように可憐である。開幕劈頭の公爵の台詞に「まるで董 *violets* の咲いてゐる<sup>どて</sup> 堤を、其花の香を」云々の予告めいた言葉がある〔逍遥訳〕。また第二幕第1場のセバスチアンの台詞にも、美人である上に「気立は、悪意を持つてゐる者でも、

美しいと讃めないわけにはいかなかったらう」という褒め言葉がある〔同〕。

前掲『自叙伝の試み』によれば、中学生の和辻は逍遥坪内雄蔵著の『英文学史』を買って読み、「非常に強い感銘」を受けた（明治三十四年初版）。シェイクスピアについても初めて学んだ。それによれば『第十二夜』は『じゃじゃ馬ならし』『から騒ぎ』『お気に召すまま』等と同じ「後期の喜劇」の一であり、1600～1601年の間に成った。あたかも沙翁著作の四期区分のうちの第二期（1595、96～1600、01年）と第三期（1601～1608年）の交である。而して、

第二期に至りては、漸く世故を知り、人情をも知りたるよりして、其の想像も實際的となれり。此の期には専ら史劇を物せり、而して其の経験の結果は、空想界よりも實際界に幾多劇詩の好材料あることを悟りしものゝ如し。此の期の作はおしなべて雄渾勁拔なり。／第二期の終らんとするころ、シェークスピアは人生の不幸辛酸を自家の身上に経験せり、彼れは愛児を失ひ、且つ父をも失ひ、剩へ、朋友に対しても快らざることありき。此等の事実が多少因縁となりしにや、第三期に至りては、優雅なる恋愛、雄壮なる戦場の有様などを写すことをとゞめて、深く人情の根柢を探らんと試みし概あり、表のみきらびやかなる人生の皮相を離れて、其の暗黒なる裏面に徹底し、事物の神髓を研究し「人間の害悪とは何ぞ」といふ疑問に答へんとせるが如き趣あり。此の期の作は何れも沈痛にして激切なり。

とある。史劇とは『ヘンリー四世』『ヘンリー五世』等、悲劇とは『ハムレット』『オセロー』『リア王』『マクベス』等である。逍遥は専らこれらを眼目とし、同時期の喜劇群を正しく評価しなかった<sup>8)</sup>。和辻の理解が喜劇に及ばなかったのも無理はない。和辻は同書に「逍遥の若い頃の学問的情熱」を感じ、さらに進んで「十九世紀のロマンティズム」に強く惹かれた。特にバイロンとテニソンの詩を愛読した。若い和辻の「思い切った浪漫的な」感情はこうした読書傾向から影響されたものがあつたと言えよう。

喜劇「十二夜」の仕掛けは双生児と変装である。瓜二つの兄妹は、同じ衣装をたとえば容易にすり変わる。冒頭、ヴァイオラは女を捨て、死んだ兄になり代わった。ところが内なる女が公爵を恋し、男の外音が不慮オリヴィアに慕わ

れる。この背反は決闘と結婚によって極に達し、最後の兄妹対面によって止揚される。内なる恋を育てて成功したのは二人の女である。公爵やセバスチアンは引き立て役にすぎない。和辻少年が魅せられたのは唯一、ヴァイオラの可憐な美しさであった。

「菜の花物語」の源泉は元より一つではない。桂子像にはまたキーツの蛇女「レミア」の影も認められる<sup>9)</sup>。その他にバイロンやテニスンの浪漫的な詩の影も見すぐすことはできないであろう。

## 注

- 1) 辻憲男「《すずらん抄》和辻哲郎の哀愁―「菜の花物語」から『古寺巡礼』へ―」(『親和国文』第四十四号、二〇〇九年十二月)。「十二夜」と「菜の花物語」の関係については簡単に、「ヴァイオラは難破船から海岸に漂着し、男装の麗人となった。心中に公爵を慕い、女伯爵に求愛され、生き別れた双子の兄と再会する。「菜の花物語」の後半部、松村は漂泊の旅に出て船中で病気になる。松村と「僕」は二人で一人の人物である。あるいは双子の兄になり、あるいは公爵や女伯爵になる。純愛物語の構想は、喜劇『十二夜』の女―男の平行と交錯を知っての上である。これを広義の影響関係と言ってもよいであろう。」と記した。挿絵は後掲のように「寧ろ現代英国の理想的少女」である。
- 2) 同書巻末の広告文中に、「単に世界文学の梗概を紹介するを以て足れりとせず、併せてその血あり肉ある原作の全影を例へばラムのシェイクスピアに於けるが如く縮写したるもの也」とある。つまり叢書全体がラムの流儀を手本にしたのである。
- 3) 上田敏、夏目漱石の校閲。敏の序文、漱石の「小羊物語に題す十句」等を付す。明治三十七年刊。
- 4) 原作戯曲の五幕と場は次のとおり〔オ家＝オリヴィア家〕。第一幕（1公爵邸、2海岸、3オ家、4公爵邸、5オ家）、第二幕（1海岸、2街路、3オ家、4公爵邸、5オ家の庭園）、第三幕（1オ家の庭園、2オ家、3街路、4オ家の庭園）、第四幕（1オ家の前、2オ家、3オ家の庭園）、第五幕（1オ家の前）。
- 5) ラムの原文は、Viola, who was herself in such a sad affliction for her brother's loss, wished she could live with this lady, who so tenderly mourned a brother's death. ちなみに、近年の野上弥生子訳でもごく簡素である、「自分でも兄を失って、同じように悲しんでいるヴァイオラは、それほど優しく兄の死をいたんでいるその婦人といっしょに暮らしたいと思いました。そこで船長に、自分はオリヴィアに奉公したいから、紹介してくれないかと頼みました」(岩波少年文庫『シェイクスピア物語』昭和三十一年)。なおシェイクスピアの原文は、Vio. O that I served that lady/And night

not be delivered to the world, /Till had made mine own occasion mellow, / What my estate is! (I. ii)

- 6) ちなみにラムの「原序」に、この物語をどうか、読者たる兄が幼い妹さん方に読み解いてあげてほしいという一節がある。中でも「十二夜」などはそのような「親切」に最適の一篇であったであろう。「原序」は杉谷訳には無く、前掲小松訳が初訳。
- 7) 実際に大阪の博覧会に出展された、和田英作の油絵「こだま」。このあと桂子は須磨の友人の話をする。参照、前稿「フランチェスカ挿話批評史稿－禿木、敏から抱月、漱石まで－」（神戸親和女子大学『言語文化研究』第五号、二〇一一年三月）の注2。
- 8) 逍遥訳の『十二夜』刊行は大正十年（一九二一）まで降る。而して同書の「緒言」では「此作が喜劇作家としての沙翁の円熟期を代表する傑作中の随一たることは争ふべからず」と賞した。悲劇偏重は逍遥だけではない。中島孤島編訳の『沙翁物語 ハムレット及ヴェニスの商人』（ラム原著）には「シェークスピアの生涯」を付載するが、そこでも喜劇はほとんど顧みられていない（通俗世界文学第六編、明治三十六年刊）。
- 9) 前稿「和辻哲郎の『レミア』一付、射干訳「ラミヤ」翻刻－」（『親和国文』第四十五号、二〇一〇年十二月）。

(2011年11月16日)



紫ノトイレス……(像のウイオラ、後-T.M.)

杉谷訳『沙翁物語』の挿絵「ヴァイオラの像」。レイトン筆、赤の単色刷り。「但し写実的考證的ヴァイオラ（上代メッサリヤの女性）といふよりは、寧ろ現代英国の理想的少女だといふことであります」（同書「挿絵につきて」）。